

文献上よりみた九州中・南部の近世服飾  
 和洋女大文家政 鷹司繪子

目的 従来常民資料により推定された近世の農民服飾と、同時代資料で実態を求めたのが目的である。特に九州中・南部ととりあつた。

方法 果都市町村史・地誌・法令・紀行・行政史料他、文献資料との検討を行う。

結果 島と云ふ／＼の子とりではあるが、九州は、北部に長崎街道等を中心とした文化圏を考へなければならなかった。それを除いた地域にどんな衣生活が展開したかを求めたのである。外国の影響が古くからあった当地域は鎖国の時代でも南に琉球との交流があった。そうした品々は直接人々に使用することは許されしなかったが、大藩を含む地域ではあり、上方からの船による風俗伝播もあって奢侈化は防げぬところであった。しかも「つり」売りが衆分の出費を促したとすることは注目に値する。反面はたしと洗うこともなく過剰生活も併存する。勿論/部式服飾圏であるが、広大な地域でもあり、隠れてあまり衣服を必要としな所、長く行政面でもふれられずにあった隠れ里の皮革を手とった所々の未発達な生活、或は高層人の子孫として/郷土の翹楚衣服を位の子生活、華を採らぬ面と持つのが当地域の特長である。